2025年2月2日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

み言葉をください

［マタイによる福音書8章5～13節］

さて、イエスがカファルナウムに入られると、一人の百人隊長が近づいて来て懇願し、「主よ、わたしの僕が中風で家に寝込んで、ひどく苦しんでいます」と言った。そこでイエスは、「わたしが行って、いやしてあげよう」と言われた。すると、百人隊長は答えた。「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また、部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。」イエスはこれを聞いて感心し、従っていた人々に言われた。「はっきり言っておく。イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。言っておくが、いつか、東や西から大勢の人が来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席に着く。だが、御国の子らは、外の暗闇に追い出される。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」そして、百人隊長に言われた。「帰りなさい。あなたが信じたとおりになるように。」ちょうどそのとき、僕の病気はいやされた。

[1]　権威ある言葉を語るイエスに

　私たちはこうやって日曜日の礼拝に参加しています。共に神様を賛美し、聖書の言葉に耳を傾け、その解き明かしを聞きます。その礼拝の時間を皆さんは大事にされているからこそ、ここにおいでになっている訳です。牧師の話と言うのは、その時々で心に響いてきたり、逆に、今日は全然響いてこないと思ったり、色々な印象があると思います。ただ、ひとつ私の気持ちを言わせて頂くと、これはいわゆる講演会ではないので、宣教全体を、何か知的に理解しないといけないと思わないで頂きたいと思います。礼拝の全体を通して、沢山でなく、ほんの一つで良いと思います。「わたしは今日はこのみ言葉をもらったな」とか「この点が私の信仰生活の宿題になったな」と言うように、この一時間ほどの礼拝の中で完結させないで、何かを持ち帰って頂ければ嬉しいなと思っています。つまり、今日の午後から、聖書のみ言葉や自分が受け取った課題を思い巡らしながら生きる一週間を始めたいと思います。これはもちろん、私自身の事でもあります。

　今日の聖書箇所の中で、百人隊長が、「ただ、ひと言おっしゃって下さい。そうすればわたしの僕はいやされます」とイエス様に言ったその言葉に、「信仰（生活）」とは何なのか、ということを考えさせられました。この百人隊長は、（多分彼は、ユダヤ人ではない、ローマ人だったでしょう）ただ、イエス様の力あるひと言、権威ある一言だけ頂ければ、十分だと思ったのです。あとはもう何もいらないと。信仰の神髄と言って良い、「ただ、ひと言おっしゃって下さい」つまり「み言葉をください」という告白をしました。聖霊は本当に、一人ひとりに自由に働かれるのだなあと思いました。ローマの軍隊組織の中、また、皇帝・カエサルを神のように崇めることが求められる環境の中で、一人のユダヤ人イエスの前に彼は進み出て、心の中にあった、自分ではどうすることのできない問題を、そのままイエス様に打ち明けたのです。なぜ、イエス様だったのか、また、なぜイエス様に懇願しようとしたのか、それは分かりません。不思議と言えば不思議。けれども、今、私たちが今教会で礼拝を捧げるように導かれていることも不思議な事ですよね。

　ただ、もしかしたらこういうことなのかなと思うことがあります。イエス様が山上の説教を語り終えた時、それは、この前の章7章の最後に書かれていますが、28節以下にこうありました。「イエスがこれらの言葉を語り終えられると、群衆はその教えに非常に驚いた。彼らの律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである」。 ―イエス様の語られる言葉に、群衆は感動したのです。この人のように語る方はいなかった。話が上手とか巧みとかそういうことではなく、言葉に「権威」があって、それが心に中にズン！と響いてきたのです、きっと。もしかしたらこの群衆の中に、このユダヤの地にローマから来た百人隊長もいたのかもしれません。しかも一回だけではなく、何度も主の言葉の説教に心奪われる経験をしていたのかもしれません。そして思った。この方には、まことの神の権威を感じると。

[2] 神様の命令系統が発動

　私は今日の聖書箇所を読んで、自分の信仰には大切なことが欠けているな、と思わされました。それは何かというと、神様を、イエス様を本当に権威ある方として受け止めているだろうかということです。もちろん、イエス様は私たちを「友」と呼んで下さるお方です。柔和で優しい方だと思います。しかし、それだけじゃないでしょう。私たちは本当はこの方の前に出る、と言うのは恐ろしいことだと思います。こんなことを言った方がいます。もし私たちが、例えば天皇陛下に招かれたとしたら（まぁ、総理大臣とか大統領でも良いのですが）、その人の目の前で話を受ける時に、足を組んだり、そっぽをむいたり、出たり入ったりはしないでしょう。礼拝とは、真の神様のみ前に出る行為です。その時に、結構気軽な感じでみ言葉を受けていませんか、と。ドキッとさせられました。

　この百人隊長の態度を改めてみてみましょう。こうありました。「イエスがカファルナウムに入られると、一人の百人隊長が近づいて来て懇願し、「主よ、わたしの僕が中風で家に寝込んで、ひどく苦しんでいます」と言った。そこでイエスは、「わたしが行って、いやしてあげよう」と言われた。すると、百人隊長は答えた。「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また、部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。」

　読んでいて、ちょっと不思議に思いました。この百人隊長は、「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません」と言っていますね。イエス様のことを、神様の権威を帯びた、畏るべき方だと認識しています。しかし同時に、その方のみ前に大胆に進み出ているのです。「畏れ」を持ちながら、しかし背を向けるのでも、また諦めるのでもなく、自分自身を丸ごとイエス様の前に置いているのです。ああ、これが信仰だな、これが礼拝だなと思いました。そして、自分は、このような真剣勝負というか、一期一会というか、そのような思いで礼拝に出ているかな、と問われたのです。

イエス様は、こ自分の僕・部下を本当に心配している百人隊長の言葉を受けて、初めは「わたしが行っていやしてあげよう」と言われたのです。私たちはこういうイエス様こそイエス様らしいと思ってしまいます。寄り添って下さるお方。しかし、百人隊長は**「いえ、ただひと言おっしゃって下さい。あなたのお言葉は権威あるお言葉ですから、それで十分です。それで僕はいやされますから」**ということを言いました。―あぁ、このような強い、み言葉に対しての完全な信頼をさせて頂きたいと思います。ここにあるのは、言葉に、何か魔術的と言うか、薬のような効果を求めているというのではないと思います。そうであればイエス様は「イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない」と驚かれなかったと思います。百人隊長は「命令系統」を心得ていた人です。「わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また、部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします」。なぜそのような命令系統があるかと言えば、「ゆるみ」が生じて、救いが遅くならないためではないでしょうか？例えば電話119番に緊急コールが鳴ったなら、それを受けた担当者は話を聞いて判断をした後、直ちに救急車や消防車を派遣するよう指示を出します。そして、待機していた隊員は命令一つで即時に行動します。何故か。命がかかっているからです。生きるか死ぬかがかかっているからです。この百人隊長は、イエス様の前に来て、緊急コールをやったのです。そして、イエス様は神の言葉そのものの方ですね。この方の口から出る言葉は、命そのもの。その命の言葉を下されば十分です！と言ったんですね。主の言葉は、まるで光速です。歩いて向かうよりもずっと早い。弱人体調は、‟イエス様を使い倒した”と言ったら語弊がありますけれども、私たちも、そのようにイエス様に全き信頼を持って「ひと言おっしゃってください。み言葉をください」と願っていいのですね。それをイエス様は喜んで待っておられると思います。

[3] 自立した信仰者に

よく考えてみると、私たちもまた、「わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません」と言わなければいけない存在ですね。しかし、その自覚を持ちつつ、そういう者であるにもかかわらず、敵である私たちを救うために、十字架で命を投げ出されたお方以外、誰の所に私たちは行けばいいのでしょうか？―「この人による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」（使徒行伝4:12　口語訳）とあるように、私たちには、この主がいます！この百人隊長、ユダヤ人たちが神様のご計画の順番からは遠いと思い込んでいたこの者に救いが訪れたように、今、私たちも（私たちも異邦人です）、「み言葉をください」と願う信仰に立つことが許されているのです。さぁ、私たちを愛して下さるイエス様を愛し返しましょう。この方の言葉は必ず成ることを信じてみ言葉を握り、たとえ孤独の中にも神様・イエス様と共に生きて行く、自立した信仰者とならせて頂きたいと願う者です。神様は、私たちの心の深い叫びを誰よりもよくご存じで、執り成して下さってお方なのですから！お祈り致しましょう。

主なる神様、あなたの御名を讃美します！わたしたちは頭でっかちになりすぎているのかもしれません。あなたの愛は本当に真直ぐな愛です。それを「はい。アーメン」と真直ぐに受け止めることが出来ますように。また、あなたのみ前に行くとき、正しい畏れと、あなたの口から出る言葉を慕い求め、深い信頼の中で、その言葉を信じて生きる逞しい信仰者にして下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。